

子どもの「一輪車乗り」の指導方法に関する事例的考察

山本 悟*・周東和好**

(平成24年9月28日受付；平成24年11月5日受理)

要 旨

本研究の目的は、筆者らによって開発された「直接補助を用いない一輪車乗りの学習指導方法」の有効性を子どもに対して検証することであった。

そのため、小学生2年生女兒に対して「直接補助を用いない一輪車乗りの学習指導方法」によって、指導実践を行った。その結果、この女兒は1日あたり1時間練習し、7日目の練習で一輪車乗りを達成した。

子どもを教えるための観点として明らかとなったことは、抽象的な動きの課題を具体的な動きの課題にすることと、そのための練習の場の工夫を行うことである。すなわち、「ストップ&ゴー」という課題を「台から台へ走行する」という課題に変更することであり、そのための「練習の場の設定」である。

KEY WORDS

一輪車 Unicycle, 動きの指導方法 Teaching Method of Movement,
直接補助を用いない学習ステップ Learning Steps without direct supporter

1 序

1.1 はじめに

本研究で取り上げる一輪車 (Unicycle) は、タイヤが一つ、ハンドルがないという用具特性をもつ乗り物である。これまで一輪車乗りの学習指導方法は、国内外の文献においては第三者 (指導者あるいは学習者同士) が走行者の手を持ち走行させる直接補助^{注1)} (図1) を用いる方法が紹介されている^(1,2,3,4,12,15,20,22,23)。このことは、一輪車乗りの指導を行う場合、第三者 (指導者あるいは子ども同士) が走行者の手を持って走行させれば、そのうち一人で乗れるようになる、という認識が潜んでいる。しかしながら、実践現場では、一輪車乗りの習得を目指した場合、すぐに乗れてしまう学習者もいれば、一方で何度練習しても習得することができず、悩んでいる学習者や、一輪車乗りの習得をあきらめてしまっている学習者が存在している。

このような現状の中、筆者らは直接補助を用いずに一輪車乗りを習得した事例にはじまり、直接補助を用いずに一輪車乗りの習得を促す学習指導方法について一連の実践と研究を行い^(25,26,27,28)、「初心者指導における学習ステップ」を構築した。そこでは、直接補助を用いることなく、成年男性1名、成年女性3名に一輪車乗りを習得させることに成功している。しかし、この直接補助を用いない方法が子どもの一輪車乗りの習得を保証できるものであるかどうかについては検証されていない。

1.2 研究の目的

本研究では、小学生に対して直接補助を用いない一輪車乗りの学習指導方法の有効性を検証するとともに、一輪車乗りを指導する際の観点について検討し、一輪車乗りの指導方法論に寄与しようとするものである。

1.3 研究の手順と方法

本研究は以下の手順で行われる。まず、

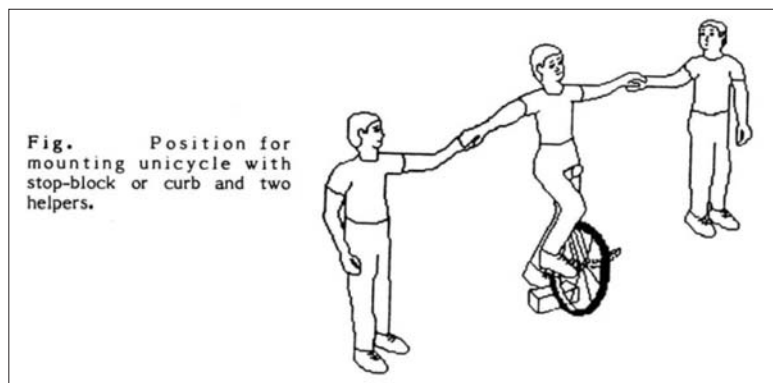


図1. 直接補助を用いた練習方法 (文献4)

先行研究に基づき一輪車乗りの指導において「直接補助を用いない」ことの特徴や意味について言及する。次に、小学生女子1名に対して「初心者指導における学習ステップ」(図2)に基づき指導実践を行う。その指導実践中に生じた問題や出来事について発生運動学^(8,9,10,11)に基づいて考察を加え、子どもを指導する際の観点を検討する。

2 先行研究の概要

2.1 直接補助法による一輪車乗り指導の問題点

筆者らは、先行研究において一輪車乗りに関する国内外の文献^(1,2,3,4,12,15,20,22,23)を詳細に検討し、ほとんどの文献において、その学習指導方法が「直接補助」を用いていることを明らかにした^(26,27,28)。そして、太田らの「上手な補助者が手を持つと上達の度合いが著しく早い」⁽¹⁶⁾という報告や、清野の『一輪車乗りビギナーズカード』⁽²⁰⁾で補助者を「熟練者」としている補助者の能力に関する指摘を踏まえ、直接補助法による一輪車乗り指導の問題点を検討した。すなわち、「上手な補助者は達成に不可欠な努力操作の動感をつかませるために、学習者が不足している技能に応じて援助し補う動作内容とその力加減をする」ため、「上手な補助者が手を持つと上達の度合いが著しく早い」のである⁽²⁸⁾。そのため、補助者の技能が低い場合には、習得を阻害させるばかりでなく、怪我や事故につながる危険性がある。

また一方で、体育授業の学習集団においては一輪車の熟練者や上手な補助者が少ないのが一般的な現状であり、上手な補助を期待することは難しいという問題がある。そのため、直接補助を中心に学習を進めると、かえって学習を停滞させてしまい、怪我や事故につながる危険性があると考えられる。「器械運動の指導法の改善に関する実証的研究」⁽⁵⁾でも指摘されているように、学校体育のような多数の学習者に指導を行う場面では、指導者が学習者一人ひとりに対して、直接補助を行う指導には限界がある。こうしたことから、直接補助を用いずに自力で一輪車乗りの習得へと方向づける指導法の開発は、体育指導場面において、非常に大きな意味をもっている。

2.2 直接補助を用いない指導方法

筆者らは、以上のような問題点を解決するために、「初心者指導における学習ステップ」(図2)を考案した。この学習指導方法の内容は図2に示す通りである。この方法はステップを4つの段階に分け、学習課題を構成している。

【ステップ① 一輪車に乗る以前の予備的な動き】

- ア) 一輪車のサドルを持って転がしながら走行
 - a) ジグザグ b) 走る c) 八の字
- イ) バウンド
- ウ) 一輪車回し
 - a) 右回し b) 左回し

【ステップ② 乗車と降車の動き】

- ア) 固定物を使って、片足だけペダルに足をのせ、一輪車を乗りこえる
- イ) 固定物を使って乗車して、前方降車
- ウ) 固定物を使って乗車して、サドルに座らず立って前方降車
- エ) 固定物を使って乗車して、ホッピングして前方降車

【ステップ③ 壁つたい走行】

- ア) 壁つたいで走行して向きを変えて走行し、壁を使って前方降車
 - a) 3m間を往復 b) 5m間を往復 c) 10m間を往復
- イ) 壁つたいで走行して向きを変えて(10m)再び走行し、壁を使わず前方降車
- ウ) 壁つたいで走行して向きを変えて(10m)再び走行し、そのまま自力で走行し前方降車
 - a) 3mを自力で走行して前方降車 b) 5mを自力で走行して前方降車
- エ) ストップ&ゴー

【ステップ④ 固定物から自力で走行】

- ア) 固定物のあいだを走行してそのまま自力で5m走行して前方降車
- イ) 固定物のあいだを走行してそのまま自力で10m走行して前方降車
- ウ) 固定物のあいだを走行してそのまま自力で15m走行して前方降車

図2. 初心者指導における学習ステップ (文献28)

以下では、この方法の内容について若干触れておく。

ステップ①では、「一輪車に乗る以前の予備的な動き」という、用具の重さや感覚に慣れるための学習段階に明確に位置付け、一輪車に乗る際の「恐怖心」を軽減したり、降車の局面において必要とされる動き、すなわち「一輪車を持って降車する動き」の動きの発生を促したりするための学習段階を明確に位置付けている。これらの動きは、「動きづくり」の観点から毎回の練習の準備運動で取り組み、継続的に行う。また、一輪車を転がす、回す、もってバウンドさせるという課題は左右両方の手でできるようにする。

ステップ②では、「乗車と降車の動き」の動きを取り上げ、乗り降りの技能や「両足均等加重」の感覚を養成することがねらいである。そのため、「一輪車を乗り越える」という課題から「乗車して前方降車」→「乗車して立って前方降車」→「乗車して跳ねて（ホッピング）前方降車」という内容構成である。このことによって、「初心者は乗車する際、腰がひける」という望ましくない動きの欠点を生じさせることを防止する。

ステップ③では、「壁つたい走行」を取り上げ、第三者（指導者あるいは友達同士）の影響を受けることなく、自分自身の力でバランスを保ち、自力で走行するための感覚を養う。「壁つたい走行」では支える手が片側だけになる。そのため、一定距離間を往復することで支え手を左右両方体験することができる。この課題は大まかに「壁つたい走行」→「壁を使わずに前方降車」→「壁つたい走行を経て自力で走行」→「ストップ＆ゴー」というように学習課題が構成されている。「壁つたい走行を経て自力で走行」というように「壁つたい走行」からの若干の惰性を利用して走行することはできても、「自分の力でペダルをこぐ」という動きが身に付いていなければ学習は停滞してしまう。この自分の力でペダルをこぐ」という動きを獲得するために「ストップ＆ゴー」（ペダルを水平位置から強くこぐ＋水平位置で停める）という課題を明確に位置付け、自力でペダルをこぐ動きや停める際に生じるバランスの崩れに対応する能力を身につけることができる。

ステップ④では、「固定物から自力で走行」を取り上げる。清野の『「一輪車に乗る』』ということは、惰性の回転ではなく自分でバランス操作を行い、バランスの立て直し動作が出現する状態の事を示し、ペダル20こぎ以上」である、という指摘を踏まえ、走行距離をア) 5m, イ) 10m, ウ) 15mと設定している。この段階では、走行することに夢中になり、安全な「前方降車」ができなくなることがあるため、壁つたい走行などで降車の仕方を確認しながら練習する必要がある。

3 初心者指導における学習ステップを用いた指導実践

3.1 実践の概要と対象とする学習者

3.1.1 指導実践の概要

2010年8月18日から8月24日の期間に1回1時間程度の練習を合計7回行った。なお、練習中の様子をデジタルビデオカメラで撮影し、考察資料とした。

3.1.2 対象とする学習者

対象とする学習者K.Kは、小学校2年女児である。学習者K.Kは、一輪車乗りに挑戦したことはなかったが、乗りたいという気持ちはあると述べていた。また、継続的にスポーツをしているわけではなく、短期の水泳教室や体操教室に通う経験はあった。

3.2 指導実践の様相と成果

3.2.1 指導実践の手順と成果

初心者指導における学習ステップに基づいた各課題の達成状況は表1に示す通りである。学習者K.Kは、初心者指導における学習ステップの課題をいったりきたりしながら、7日目（2010年8月24日）にステップ④の「イ）固定物から自力で10m走行し前方降車」（図3）を達成し、同日にステップ④の「ウ）固定物から自力で15m走行し前方降車」（図4）を達成した（2010年8月24日、以下、期日について「2010.8.24」のように記載する）。

3.2.2 実践中の出来事と練習の目標および練習の場の工夫

a. 実践中の出来事

学習者K.Kは、表1に示す通り、学習ステップの練習課題を習得した。練習4日目（2010.8.21）には、ステップ③の「イ）壁つたいで走行して向きを変えて（10m）再び走行し、壁を使わず前方降車」を習得し、徐々に壁つたい

表1. 学習者K.Kの習得過程

練習回数	達成課題
2010.8.18	ステップ①ア, イ, ウ) ステップ②ア, イ) ステップ③ア) a)
2010.8.19	ステップ③ア) b)
2010.8.20	ステップ②ウ) ステップ③ア) c)
2010.8.21	ステップ②エ) ステップ③イ)
2010.8.22	ステップ③ウ) a) ※補助台から補助台へ走行 (図6)
2010.8.23	ステップ③ウ) b) ステップ④ア)
2010.8.24	ステップ④イ), ウ)

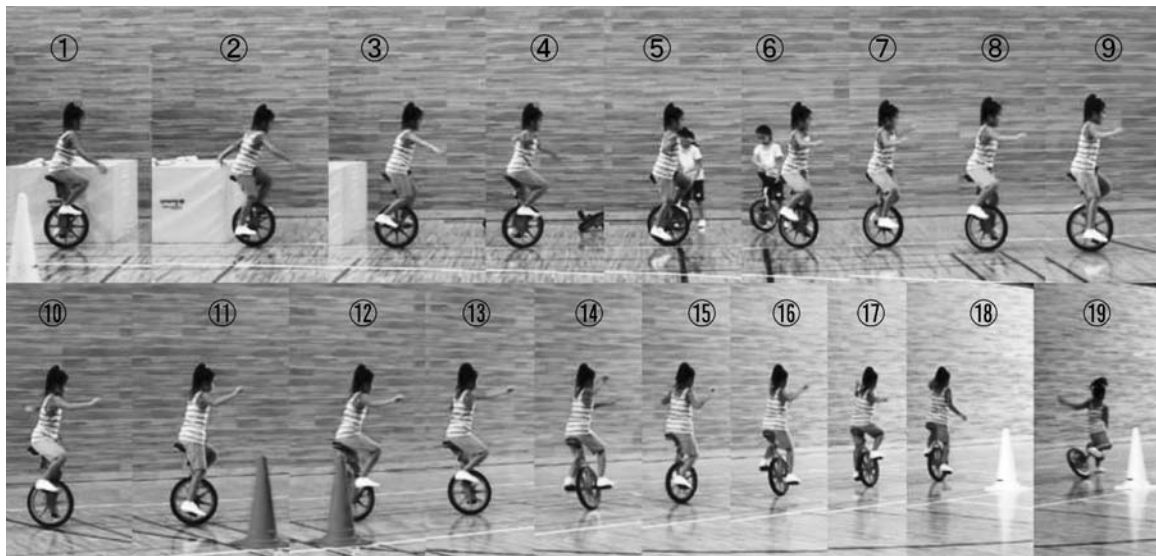


図3. ステップ④「イ」固定物のあいだを走行してそのまま自力で10m走行して前方降車 (2010.8.24)
 (図中の⑩⑪コマのコーンが5 m, ⑱⑲のコマのコーンが10m)

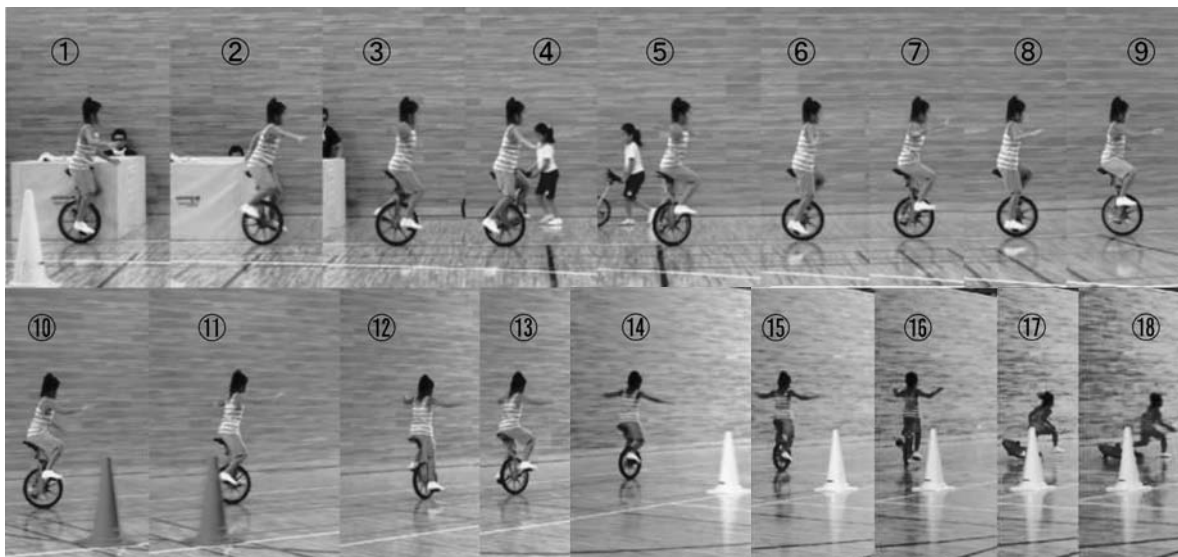


図4. ステップ④ウ) 固定物のあいだを走行してそのまま自力で15m走行して前方降車 (2010.8.24)
 (図中の⑩⑪コマのコーンが5 m, ⑭~⑱コマのコーンが10m)

走行の段階から、自力で走行する段階へと移行する必要が生じてきていた。そこで、練習5日目に(2010.8.22)壁つたい走行から自力での走行を促す練習課題、すなわち「ストップ&ゴー」を行わせることとした。この練習課題の意図は、「強くこぐ+停める」という一連の動きの中で、自力で走行するために必要な“自分の力でペダルをこぐ”という感覚や停める際に生じるバランスの崩れに対応する技能を身に獲得するものである⁽²⁸⁾。この練習課題を学習

者K.Kに指導した際に、ペダルを“強くこぐ”という動きがなかなか発生しなかった。そこで筆者は、「思いっきりこいでごらん」という助言を与えたり、実際に筆者のストップ&ゴーを見せたりしたが“強くこぐ”動きが発生しなかった。むしろ、学習者K.Kからは「よくわからない」と返答され、時には自分自身の動き方を考えすぎているせいか、ペダルをこぎだせない様子が観察された。また、ペダルをこぎ出してもすぐに転んでしまうような、不調和な動きも観察できた(図5)。この動きは、ペダルをこぎ出した後に強くこぎすぎてしまい、腰がひけて、後方へバランスを大きく崩してしまっている(図5の①~⑥)。そして、この状態から学習が発展しない様子だったので、筆者は学習者K.Kの発言や動きの意味を探ることとし、新たな練習課題を再構成することにした。

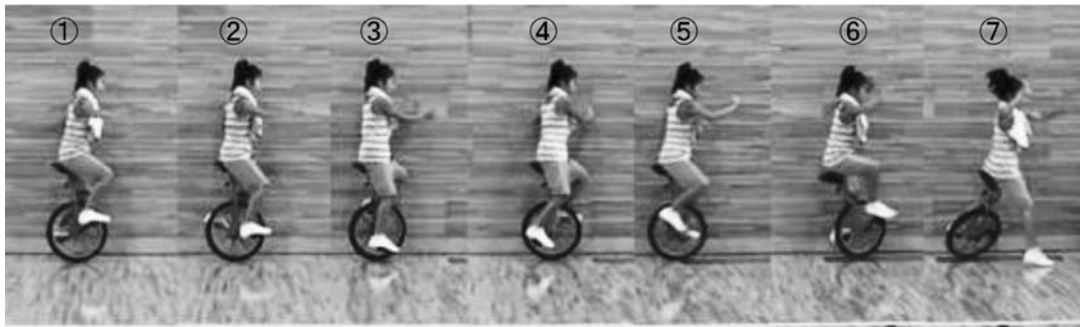


図5. ステップ③エ) ストップ&ゴーにおけるつまずき (2010.8.22)

b. 学習者の発言と動きの意味

「ストップ&ゴー」の指導において筆者が学習者K.Kに対して指示した「強くこぐ」や「思いっきりこいでごらん」という言葉は、学習者K.Kのように子どもや運動経験の少ない学習者にとって、言葉の意味が非常に抽象的であると考えられた。すなわち、一輪車乗りを未達成である運動経験の少ない学習者K.Kにとっては、どの程度力でペダルをこぐのかが非常にわかりにくいものであり、ペダルを強くこぎすぎて、バランスを保つことができず、こぎ出してもすぐに転んでしまうような動きが生じたものと考えられたのである。そのため、自分の動き方を考えすぎでしまい、ペダルをこぎ出せなくなってしまったと思われる。このことから、抽象的な動きの課題ではなく、具体的な動きの課題を志向させる必要があると判断した。

c. 練習の場の工夫とその成果

そこで、図6のように練習の場を設定した。体操競技用の「補助台」(セノー社製、幅600mm×高さ800mm×長さ1100mm)を2つ置き、台と台の間隔を約1m程度あけ、「補助台から補助台へ走行する」ものである。この場の設定の意図は、「補助台から補助台へと走行する」ことを動きの目標とすることで、子どもにとってその課題の意味が具体的であるとともに、補助台から次の補助台へと走行するために、躊躇することなく一挙にペダルをこぎ出すことが可能となり、ペダルを“強くこぐ”という動きが発生すると考えたのである。

この課題を行わせてみたところ、学習者K.Kは、補助台の方へ体重をかけ、補助台へ手を伸ばしながら、一挙にこぎ出す動きを発現させた(図6)。K.Kは出だしから一挙にペダルをこぎだすと同時に、補助台を手で押し離してい

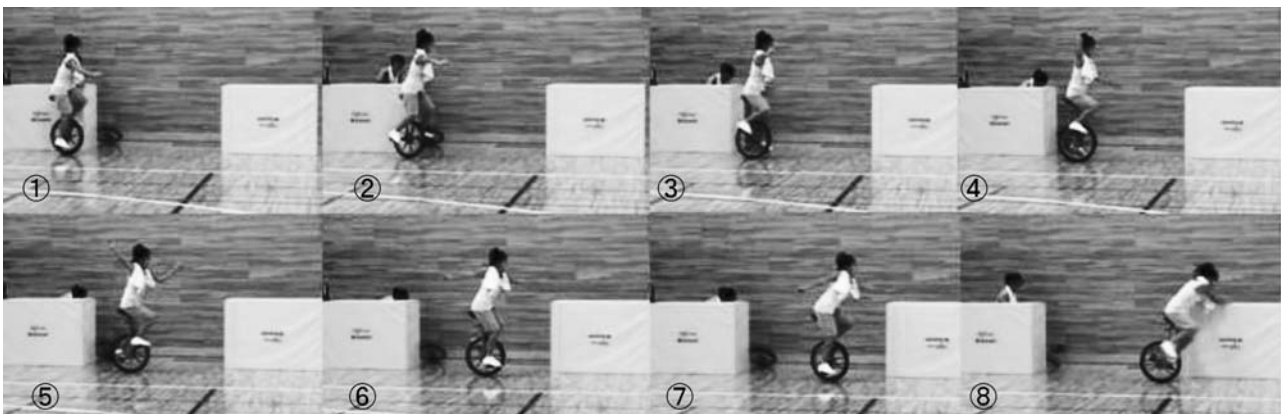


図6. 補助台から補助台へ走行する課題 (台と台の間隔約1m)

る(図6の①~③)。この補助台を押し離す動作とペダルこぎが同調し、補助台から自力で走行する動きが発生している(図6の④~⑤)。そして、自力で走行した状態から、手を伸ばしながらもう一つの補助台の方へ体重をかけ(図6の⑥~⑦)、補助台に手をかけて止まった。もう一つの補助台に手をかけた局面では、前方へ体重がかかっていることがわかる(図6の⑧)。

学習者K.Kがこの課題に取り組んだ後には、ペダルをこぎ出せなかったり、こぎ出してもすぐに転んでしまったりする不調和な動きは解消された。また、ペダルを徐々に“強くこぐ”という動きも観察された。

この「補助台から補助台へ走行する」という課題から、「補助台から補助台へ走行し、そのまま自力で走行する」という課題を交互に取り組んでいたところ、自力で走行できそうな様子が観察できたので、出だしのみ補助台を使用することとし、自力で走行する段階へと移行した。そして、7日目(2010.8.24)にステップ④の「イ」固定物から自力で10m走行し前方降車」を達成し、同日にステップ④の「ウ」固定物から自力で15m走行し前方降車」を達成したのである(2010.8.24)。

4 実践中の出来事と工夫した練習課題に関する発生運動学的考察

4.1 “強くこぐ”という言葉の抽象性と動きの目標設定

指導実践では、学習者K.Kに対して「強くこぐ+停める」という運動課題、「ストップ&ゴー」を行わせてきたが、ペダルをこぎ出せない、ペダルをこいでも後方へバランスを崩す、ということが生じた。子どもや運動経験の少ない学習者にとって「強くこぐ」という課題は、どの程度強くペダルをこいでよいかわからない、ということが考えられる。すなわち、子どもにとって、「強くこぐ」というのは、抽象的な意味をもつ動きの課題だと考えられる。

佐藤⁽¹⁹⁾は、子どもや運動経験の少ない学習者に動きの目標を示す場合、その学習者にとって、「具体的」な意味をもつ運動を志向させる必要があることを指摘している。本実践中に「ストップ&ゴー」という課題を「補助台から補助台へ走行する」という練習課題に再構成したのは、その動きの目標を「具体的」にするという意味をもつ。

すなわち、ペダルを「強くこぐ」という抽象的な動きの目標から「ここからここまで走行する」という具体的な動きの目標へと変更することで、学習者K.Kにとってわかりやすい動きの課題となったと考えられる。

4.2 動感意識の反転化作用

次に「補助台から補助台へ走行する」という練習課題の意味を「動感意識の反転化作用」の視点から分析したい。金子はその著書『身体知の構造』⁽¹¹⁾の中で、フッサールの「二重感覚」⁽⁶⁾を用いながら、自己中心化作用(コツ)と情況投射化作用(カン)の反転可能性について、次のように述べている⁽¹¹⁾。

人ごみの中を急いで通りぬけようとするときの歩き方と人の視線を感じとりながらの歩き方とでは、同じ歩行形態でもその動感志向性に決定的な差異化現象が起こるのです。(中略)いわば、状況の変化に投射していくカンが作動している歩き方の時には、自我に中心化するコツは働く歩き方は背景に沈んで姿を隠します。だれかに見られていることが気になると、どう歩くかのコツの働きが前面にでてきて、その緊張が高まりすぎると、右足と右手を同時に前にだしたりして動感不調和に陥ることも珍しくありません。反対に急いで駅に行こうとしているときには、自分がどんな格好で歩いているのかということにまで気が回りません。このことは経験的に自明のことであり、そこでは動感作用に反転化がはっきり現れているのです。老練な指導者はそれを身体知の創発作用や促発作用に積極的に活用していることは運動実践の現場ではよく知られていることです。(金子明友：身体知の構造，明和出版，2007，p.26より)

確かに、人ごみの中を通りぬける際、周界情況に意識が投射され、自分自身の歩き方は意識されない。人に見られたり、自分自身がどう歩いているのかを意識したりすることによって、その動きに不調和が生じることも容易に理解できよう。

この金子の指摘を、今回の一輪車乗りの指導事例に引き寄せて考えてみると、「ストップ&ゴー」を行う際、学習者は“ペダルのこぎ方”すなわち、“自分自身の動き方”に対して強く意識を向けることになる。学習者K.Kがペダルのこぎ方に強く意識を向けることにより、ペダルをこぎ出せなかったり、こぎ出してもすぐに転んでしまったりする、という現象が起きたものと考えられる。これは、子どもが「ストップ&ゴー」を遂行する際、自分自身の動き方

を強く意識したことによって、動きに不調和が起きたことを意味している。

学習者K.Kが「補助台から補助台へ走行する」という具体的な動きを志向すると、「ここからそこへ走行する」という状況投射化作用（カン）が顕在化され、自分自身の動き方に関する意識はいったん背景に沈むこととなる。学習者K.Kは、「補助台から補助台へ走行する」という課題に取り組んだ際に、積極的に手で補助台を押し離しながら、強くペダルをこぐ動きを発現させた（図6の①～③）。問題としていた自分自身の動きを意識しすぎてペダルをこぎ出せなかったり、こぎ出しても腰がひけて後方へ転んでしまったりする、という不調和な動きが解消されたのである。

このことから、学習者K.Kが具体的な動きの目標を志向したことで、動感意識の反転化作用が生じ、課題を達成した、と解釈することができよう。

5 結語と展望

本研究では、筆者らが開発した一輪車乗りの直接補助を用いない方法の有効性について小学校2年生女兒の指導に基づいて検証した。その結果、壁つたい走行から自力での走行を促すために「補助台から補助台へ走行する」という練習の場を工夫したことで、学習者K.Kに具体的な動きの目標を志向させることができ、このことにより、壁つたい走行の段階から自力での走行の段階への移行を促すことができた。また、子どもに対して初心者指導における学習ステップを活用した一輪車乗りの習得可能性について、その一事例を示すことができた。今後の課題として、今回の指導実践で得られた知見が他の学習者においても有効であるか検証する必要がある。

本研究の成果が、一輪車乗りの指導場面に活用され、子どもの一輪車乗りの習得に役立つことを願う。

注

1) 補助と幫助

補助と幫助ではその意味内容が異なる。金子は補助と幫助の違いを次のようにしている。「補助とは何らかの不足を補充して助ける意であり、その場合には補うことが活動の中心であり、その補充の結果、今までの不足が解消して助かるという、極めて消極的な意味しかない（中略）技を正しく成功させるために積極的に手助けをしていく行為を表す必要がある。」として、この積極的助力行為を「幫助」としている。本論では、この金子の考え方に基づいて、「幫助」の語を用いることとする。なお、文献において補助という語が用いられている場合は補助とし、筆者の論述に関しては幫助とした。

引用・参考文献

- (1) Andreas Anders-Wilkens: Unicycling-FirstSteps, FirstTricks, Meyer&Meyer Sport, 2007.
- (2) Gregg Vivolo: Ride The Unicycle, RideThe Unicycle. com, 2003.
- (3) Jack Halpern: 誰でも乗れる一輪車の本, 日本一輪車協会, pp.11-14, 1989.
- (4) Jack Wiley: HOW TO RIDE A UNICYCLE, Solipaz Publishing Company, 1987.
- (5) 朝岡正雄・周東和好: 器械運動における指導法の改善に関する実証的研究-「宙返り」を対象として-, 筑波大学運動学研究第10号, pp.55-65, 1996.
- (6) フッサール (立松弘孝訳): イデーンII-I, みすず書房, 1984
- (7) 金子明友: 体操競技のコーチング, 大修館書店, 1974.
- (8) 金子明友: わざの伝承, 明和出版, 2002.
- (9) 金子明友: 身体知の形成 (上), 明和出版, 2005.
- (10) 金子明友: 身体知の形成 (下), 明和出版, 2005.
- (11) 金子明友: 身体知の構造, 明和出版, 2007.
- (12) 久保景子・太田昌秀: 幼児のバランス感覚養成に関する研究-一輪車の指導-, キンダースポーツ伝承研究第9号, pp.6-17, 2009.
- (13) クルト-マイネル/金子明友訳: スポーツ運動学, 大修館書店, 1981.
- (14) 村上信彦: 一輪車の走行技術に関するモルフォロジー的研究, 上越教育大学大学院修士論文, 1993.
- (15) 日本一輪車協会監修: 一輪車パーフェクトブック, スキージャーナル株式会社, 2009.
- (16) 太田昌秀・清野由美: 一輪車のメダホドス, スポーツモルフォロジー研究②, pp.98-108, 1996.
- (17) 太田昌秀: 平衡感覚を育てる一輪車の指導, 楽しい体育の授業, 明治図書, pp.5-7, 1998.

- (18) 太田昌秀・豊田泰代・久保景子：0歳からはじめるうごきづくり，幻冬舎，2008.
- (19) 佐藤徹：子どもの運動志向性からみた運動能力評価の問題性，スポーツ教育学研究第29回大会号，日本スポーツ教育学会，2009.
- (20) 清野由美：一輪車の技術解明と初心者指導における一考察，上越教育大学大学院修士論文，1990.
- (21) 周東和好：器械運動指導法ー動きづくりの運動編ー，上越教育大学ポータルサイトe-Learning，2008.
(<http://juen-cs.dl.juen.ac.jp/html/kikai/index.html>) 2012年9月1日現在
- (22) 高橋健夫・松本格之助・尾縣貢・高木英樹：すべての子どもが必ずできる体育の基本，学研教育未来，pp.152-159，2010.
- (23) 土井浩信，松本格之助：心と体を育てる一輪車，日本一輪車協会，1987.
- (24) 和田肇・額田安悟：遊びとスポーツのひみつ101-9マウンテンバイク 自転車・一輪車，ポプラ社，pp.110-127，1998.
- (25) 山本悟・周東和好：初心者における「一輪車乗り」の習得過程に関する考察，スポーツ教育学研究第29回大会号，p.98，2009.
- (26) 山本悟・周東和好：一輪車乗りの初心者指導プログラムの開発に関する研究，日本体育学会第61回大会予稿集，p.219，2010.
- (27) 山本悟・周東和好：一輪車乗りの初心者指導における運動課題の創作に関する事例的考察，新潟体育学研究第29巻，pp.63-68，2011.
- (28) 山本悟・周東和好：一輪車乗りの指導方法の開発に関する実践的研究ー直接補助を用いない方法ー，スポーツ運動学研究第24巻，pp.89~107，2011.

A Case Study of the Teaching Method in Unicycle-Riding for a Child

Satoru YAMAMOTO* • Kazuyoshi SHUTO**

ABSTRACT

The purpose of this study was to verify the validity for children of a unicycle-riding teaching method which was developed by the authors and which does not use direct support.

We carried out a practicum of the “Non-Direct-Support Unicycle-Riding Teaching Method” for a second-grade female elementary student.

As a result, this girl practiced for one hour per day, and achieved unicycle-riding on the 7th day.

What became clear in terms of teaching children was the matter of turning the task of an abstract motion into the task of a concrete motion, and devising the environment for achieving this. That is, it is the changing of the notion of “stop & go” into the notion of “riding from a stand box to a stand box,” and is the “setting up of the place of practice” for making this transition.

* Niigata Prefectural School District, Takada-Minamishiro high school ** Music, Fine Arts and Physical Education